

中国語母語話者による日本語の漢語習得：連想課題を用いた語彙知識発達の検証

藤山, 智子

<https://hdl.handle.net/2324/2235999>

出版情報：九州大学, 2018, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

氏 名	藤山 智子				
論 文 名	中国語母語話者による日本語の漢語習得 —連想課題を用いた語彙知識発達の検証—				
論文調査委員	主 査	九州大学	准教授	志水俊広	
	副 査	九州大学	教授	松永典子	
	副 査	九州大学	教授	郭俊海	
	副 査	九州大学	准教授	秋吉收	
	副 査	元 九州大学	准教授	因京子	

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は習熟度の異なる中国語母語話者の日本語の漢語における知識の差を検証し論じたものである。序論では本論文の目的と用語の定義および構成について述べた。

第二章では日本語を学習する中国語母語話者を対象とした漢字・漢語に関する研究を概観した。これまでの研究は対照研究、誤用分析、習得研究などの手法により研究されている。対照研究では文化庁（1978）によって日本語の漢語と中国語の単語が表記と意味によって対照され、表記も意味も同じ漢語（S語）、表記は同じだが多義語で同じ意味と異なる意味を併せもつ漢語（O語）、表記は同じだが意味が異なる漢語（D語）、日本語にのみ存在する漢語（N語）の4種類に分類されている。習得研究ではこの4種類の漢語の意味の習得が議論され、習得難易度が明らかになっている。誤用分析では学習者の誤用が収集され誤用の原因が考察されている。しかし、習熟度が高く漢語の産出に誤用が少ない学習者と習熟度が低く漢語の産出に誤用が多い学習者の漢語の知識にどのような差があるのかはまだ明らかにされていない。

第三章では、単語を知っているということは単語についてどのような知識を持つことなのか、Nation（2001）とRichards（1976）の挙げた項目を検討し、Aitchison（2003）の母語の語彙習得プロセスとHenriksen（1999）の第二言語の語彙習得に関する考察を基底として、中国語母語話者の日本語の漢語習得過程における語彙知識の発達について考察した。さらに、第二言語における語彙知識の測定方法を吟味し、心理実験として開発された連想課題によって、中国語母語話者の漢語の語彙知識を漢字による意味推測の影響を受けずに測定できることを確認した。

第四章では連想課題による語彙習得研究を概観し、語彙知識の増加にともなう連想反応の変化と要因を詳記した。日本語母語話者の形容詞刺激語に対する反応は、刺激語に関する知識の増加に伴い、刺激語と連想反応の間に合理的説明がつかないもの（「その他」）→類語・同義語関係（PA）→統語関係（SA）へと移行することが明らかになっている。

第五章では研究課題と調査の概要を示した。研究課題は以下のとおりである。

- ① 中国語母語話者の日本語の語彙知識の発達は連想課題によって検証できるのか。
- ② 習熟度が高く漢語の運用に誤用の少ない学習者と、習熟度が低く漢語の運用に誤用の多い学習者の語彙知識には差があるのか。
- ③ 漢語の語彙知識の発達は文化庁（1978）の4分類によって異なるのか。
- ④ 語彙知識の発達の程度は文章理解に影響するのか。

第六章では実験とその結果を示した。実験 1 は研究課題 1 を解明し、実験方法としての妥当性を示すためのものである。習熟度の異なる 2 群の中国語母語話者を対象に使用頻度の高い漢語以外の形容詞を刺激語とした連想課題を行った。習熟度の高い中国語母語話者（CNS 上）の高頻度刺激語に対する連想反応は SA が多く、PA や「その他」も含めた反応全体の分布が日本語母語話者（JNS）と酷似していた。一方、習熟度の低い中国語母語話者（CNS 中）の反応は JNS より SA が少なく、PA が多かった。CNS 上の実験 1 の刺激語に関する語彙知識は JNS のレベルにまで達しており、CNS 中の刺激語に関する語彙知識はある程度発達しているものの、JNS のレベルまでには達していないことが示唆され、この結果から連想課題は中国語母語話者の日本語の語彙知識の発達を測る方法として妥当であることが示された。

実験 2 では研究課題 2 を明らかにするために漢語を刺激語とした連想課題を行った。CNS 上の反応は JNS と類似していたが、CNS 中の反応は漢語の種類によって JNS に近いものと著しく異なるものがあった。また、漢語の使用頻度にも影響されることが明らかになった。

実験 3 では研究課題 3 を解明する目的で、CNS 中の連想反応の通時的変化を調査した。CNS 中は実験 2 の時点で S 語と N 語の知識が発達していることを示していたが、実験 3 では O 語にも知識の発達を示す反応が多く現れた。語彙知識の発達の側面からみた中国語母語話者の漢語の習得難易度は S 語と N 語が同等で、O 語、D 語が続くと言える。

これらの結果から、漢語の語彙知識は表記と意味を習得した上で、日本語での運用経験を経て、徐々に発達していくことが明らかになった。連想反応に表れる共起や類語の知識を持つことは中国語母語話者の日本語での産出能力に繋がることが示唆された。

さらに、第七章では研究課題 4 を検討するために語彙知識の深さと文章理解との関係を調査した。文章理解テストの得点が高いグループは漢語や漢字語に関して豊富な知識を有しており、文章の内容を十分に理解するには意味も含めた多様な知識を利用している可能性が示唆された。

第八章では、本論文のまとめと結論を示した。本研究では母語と学習言語の同形同義語は意味以外の情報に注意が向かいにくく、そのことが共起する語や類語などの産出に関わる情報の習得を遅らせる結果となっていると結論づけた。最後に第九章では日本語教育への示唆として中国語母語話者が日本語の漢語に関して学ぶべき項目をまとめた。

以上のように、本論文は中国語母語話者の日本語の漢語における知識の習得を様々なデータから実証的に明らかにしようとしたものであり、貴重な知見を提供してくれるものとして評価でき、第二言語習得理論および日本語教育の分野において価値ある貢献となるものである。よって、論文調査委員会は本論文を博士（比較社会文化）の学位を授与するに値すると判断した。